令和2年３月１日

校長会 みえ No.54

三重県小中学校長会　広報　第54号

●発行●三重県小中学校長会 津市桜橋 2-142　三重県教育文化会館内　TEL 059-227-7011　E-mail　info@mie-kochokai.com
●編集●三重県小中学校長会　広報委員会　●印刷●光出版印刷株式会社 松阪市久保町 1885-1　TEL 0598-29-1234

新校舎

旧校舎

学年合唱

私の学校づくり

成長し続けることを目標に

明和町立明和中学校
校長　大　西　　伸

本校は、先輩方から教師のイロハを学んだ初任の地であり、おそらく教職から退くことになる地であり感慨深い。減ったとはいえ、今も六百人近い生徒たちが学ぶ。そして、新年からは新校舎で授業が始まる。

始業式で、「心が変われば、運命が変わる」と生徒たちに話している。「でも」「だって」「どうせ」と言う前に、「まずは」と唱え、できることを一つずつ実行していくことを伝えている。入学式では、「大人への階段を登っていくみなさんを強く後押しします。大人になろうと努力する人を認め励まし続けます。」と話している。

明和中生徒会キーワードである『誇り』～あいさつ・行事・仲間～。六年前の生徒たちが打ち立てたという。明和中の「自慢できるところ」「誇れるところ」である元気な挨拶、熱く盛り上がれる行事、仲間との絆。この三つの柱をさらに高めることで、明和中の『誇り』が高まるという考えだ。『誇り』ができてから明和中は大きく生まれ変わったという。その後も生徒たちによって、『誇り』を磨き高めることが受け継がれている。例えば、文化祭の合唱は、卒業した先輩たちの合唱を超えてやろうという意気込みで創りあげていくというように、先輩を超えていく文化の確立に取り組んでいる。

毎年、新採教職員が複数配置され、若い職員が多い。皆、熱心である。終わりの学活を済ませると、部活動へ飛び出していく。先輩職員たちは、一人前への階段を登ろうとしている若い職員を強く後押しし、認め励まし続けている。生徒たちに伝えていることは、職員に対する私の願いでもある。

今年はもう一つ伝えてきた。「古いのは仕方がない。でも、綺麗に、大事に使うことはできる。」と。生徒たちと私たち教職員の様々な営みを見続けてきた古い校舎は、間もなくその長かった役目を終えようとしている。

今日的課題の克服に向けて

コミュニティスクールから学んだこと

四日市市立四郷小学校
校長　福島孝直

本校は、明治時代に地元名士である伊藤小左衛門氏が創立以降、地域住民に大切にされてきた歴史があります。現在でも「地域の子どもは地域が育てよう」とする高い気運があります。この気運を土台とし、市より平成二十二年にコミュニティスクールの指定を受け、学校運営協議会を設置し、保護者・地域が主体的に参画する「地域とともにつくる学校」推進への取組が始まりました。校長の示す教育ビジョン実現に向けた「学校の応援団」として、学校支援ボランティア（学習支援、クラブ活動支援、図書館、交通安全、学校環境整備）のコーディネート役を担っていただいています。四郷の子どもたちが、郷土を誇りとし、健やかに成長していくために、地域とのつながりを生かし、信頼され、愛される学校づくりを目指しています。

私としては、学校だよりや学校ホームページで、学校運営協議会や学校支援ボランティア、そしてPTAの取組についてタイムリーに紹介し、成果や感謝の思いを伝えてきました。職員は、図書館ボランティアと共に読み聞かせに取り組んだり、保護者や地域の皆さんと共に学校環境整備に汗を流したり、登下校の安全見守りをしたりしてきました。私は趣味の写真撮影を生かし、校区の施設や文化財を写真に撮り、ガイドマップにまとめ校内掲示をしたり、地区行事に参画したりするなど、積極的に地域と交流の機会をもってきました。その理由は、コミュニティスクール委員構成の中心となっている地域の方々への感謝の証でした。何よりも大切にしたことは、地域の方との挨拶や会話でした。

学校・地域・家庭の三者が一体となり、子どもたちを育成していく時代と言われて久しいです。学校は、地域に対し、さまざまな協力を要請し、地域はそれに応え、一定の教育効果をあげてきました。どの校長先生方も個性を生かし、創意工夫しながら日々地域と関わっておられることでしょう。

一方で、これからの学校ができることは、地域に協力を求めるだけではなく、「地域貢献」が必要と考えています。例えば、園芸委員会では、栽培した季節の花を地元施設に設置し、地域の皆さんに喜ばれています。また環境委員会では、アルミ缶回収を行い、近隣の身障者施設に提供しています。他の委員会活動についても、地域に貢献することで、今度は地域から感謝されるような取組を拡大していきたいと考えています。キャリア教育の視点から、子どもたちの自己有用感が高まることも期待できるでしょう。

ある交通安全ボランティアの方が、「子どもからお礼の言葉や手紙をもらった時ほど生きがいを感じたことはない。」と繰り返し語っておられました。学校は、子どもたちへの指導を通して、地域の方にやりがいを与えることもできます。その土台として、人と人をつなぐ思いやりある言葉がけが大切です。今、私たち職員は、子どもたちへ、保護者へ、地域へ、そして職員間での日常の挨拶や会話ができているか、校長を含め一人一人の職員自身による振り返りが必要だと考えます。

本校の子どもたちは、日々地域の方から様々なことを学びながら、地域とのつながりを深め、地域を大切にする気持ちを育んできました。「子どもは、身近に接する大人のように育つ」と聞きます。子どもたちのお手本であり続けるよう、実践していきたいです。

ワンチーム中原の取組

松阪市立中原小学校
校長　上村泰子

一　はじめに

本校は、昨年度から「自ら学ぶ力、ともに生きる力の育成をめざして～能動的な聴き方を通して～」と題し、「特別の教科　道徳」を研修の窓口に取組を進めてきました。

本年度は、「道徳教育の抜本的改善・充実に係る支援事業」の実践推進校に松阪市から指定され、研究に取り組んでいます。その取組の一端を紹介いたします。

二　学び合う集団作り

本校では、「能動的な聴き方」を通して、学び合う集団作りに取り組み四年目となります。「能動的な聴き方」とは、授業等の場で返事や反応を返すこと、話し手に体を向けて聴こうとする態度、自ら学習に取り組もうとする姿勢等のことです。そのような聴き方を「学びに向かう・学び合う・自ら課題を見つける学級集団作り」の中で育成していこうとしています。

そのために、「能動的に聴く中原っ子のめざす姿」として、低中高学年の発達段階に合わせたねらいとめざす子どもの姿を全教職員で話し合い、共通理解を図っています。

三　教職員の指導力を高める校内研修

❶考え、議論する道徳にむけて

今、求められている道徳教育について学んで、全教職員が同じ出発点に立つために、県教育委員会の指導主事を招聘し研修会を持ちました。また、道徳研究の先進

校である桑名市立星見ヶ丘小学校を視察させていただき、学んできたことを他の教職員と還流しました。各人がいつでも手にとれるように小学校学習指導要領解説「特別の教科　道徳編」を一人一冊持ちました。

毎回の研修会の場では、お互いが気兼ねなく話し合える学び合う教職員集団をめざし、取組を交流しています。

❷研究授業

全教職員が必ず提案授業を行って、事前事後検討を学年部で持ち、話し合う中で研修を深めています。

さらに全体研修として、低学年部と高学年部から一つずつ提案授業を行い、県の道徳教育アドバイザーの河合宣昌先生にご来校いただき、ご指導を仰いでいます。

今年度も昨年度に続き、市内の先生方に参観いただき、事後検討会では貴重なご意見を多数いただきました。

四　中原スタンダード

本校では、全教職員がワンチームとして指導にあたるためのよりどころとして、様々なスタンダードがあります。ノート指導・自主学習ノート指導・すらすらタイム・学習規律に関わるものなどです。

今年度は、「特別の教科　道徳」の中原スタンダードを作成しました。作成する中で疑問点等を話し合い、教職員間で共通理解を図っていくことができました。

市の公開授業研究会の場で、この中原スタンダードを説明とともに紹介させていただき、来校された先生方に喜んでいただきました。

五　おわりに

これまでの研修を通して、本校の教職員は、「特別の教科　道徳」の基本や授業の進め方が少しずつ分かるようになってきたところです。道徳科の授業が表面的に終わってしまわないように、学級集団作りと合わせ、「考え議論する道徳」に向けて、今後も切磋琢磨し合いながらワンチーム中原として研修を推進していきたいと思います。

スクールサポートスタッフの配置から

志摩市立東海中学校
校長　山口泰弘

今の時代、多くの学校現場で教職員の長時間労働に関する深刻な実態があります。本校でも、働き方改革待ったなしの状況で平成三十一年度のスタートを切りました。そんな中、四月当初にスクールサポートスタッフ（以下、SSS）配置の打診があり、五月下旬から配置していただけることになりました。

今回、県教委から配置していただいたSSSの趣旨には、「多様な地域人材をスクールサポートスタッフとして県内公立小中学校及び義務教育学校に配置し、教員が抱える事務作業等の負担を軽減させることで、教員が本来の教育活動に専念でき、児童への指導や教材研究等に注力できる教育体制の整備に寄与する。」とあり、教員でなくてもできる業務をSSSに行ってもらうことで、本来の仕事に注力できるメリットは非常に大きいものでした。

しかし、配置された当初は、SSSについての知識に乏しく、さらに新たな課題も見えてきました。それは、①SSSに任せる仕事は何かをしっかりと伝える。②コーディネーター担当者の負担を増やしてしまわないような仕組み・SSSに仕事を頼みやすい仕組みを作る。③SSSに業務を任せることで生み出された時間は、別の仕事に充ててしまうのではなく、ワークライフバランスの充実に充てる等です。そうでなければ、子どもたちの指導の充実にはつながっても勤務時間の縮減にはつながらないというジレンマもありました。

ただ、時間の経過とともにSSSの効果的な活用方法がわかってくると、そのような課題は徐々に解決されていきました。それと、SSSとして配置された方が以前に本校に勤務したことがあり、学校の仕事についての理解が深かったことも幸いでした。授業で使うプリントの印刷やデータの入力、小テストの採点、電話対応等、様々な場面でSSSの活用が見られるようになってきました。

これまで、大きな行事の前や長期休み前など大変忙しい時にも、教員は資料の準備や印刷等に多くの時間を費やしていました。それらをSSSに任せることで、教員の負担は確実に減り、本来の業務に専念する時間に充てることができるようになりました。そのことは、時間外労働時間の削減にも大きく寄与しています。また、文房具や教材、資料室等の整理整頓をしてもらったことにより、様々なものが常に使いやすい状態になり、無駄な時間が減少しました。

「学校における働き方改革に係る教職員アンケート」の結果を考察すると、教職員から出された回答で一番多かったのが、教職員数を増やすことでありました。そのような状況になれば非常に有効ではありますが、すぐには実現することが難しいのが現実です。SSSの配置は、そういった意味でも非常に有効なものであると思います。

今後、さらに変化の激しい時代を生きる子どもたちに必要な力をつけていくには、教師はまず何より、学習指導をはじめとする教育活動に今まで以上に力を注ぐ必要があります。そのためにワークライフバランスを充実させ、好循環を生み出してほしいと思います。SSSの配置をはじめ勤務時間縮減に向けての様々な取組は、そのために必要不可欠なものだと考えます。教職員が時間を有意義に使い、そして、子どもたちにとって魅力ある教師であるためにも、実効性のある勤務時間の縮減に今後も取り組んでいきたいと思います。

県教育委員会との懇談会

「地域とともにある学校づくりについて」「教職員の資質向上について」をテーマに

令和元年十二月十六日（月）　於：県庁教育委員室

小中学校長会役員と県教育委員会教育長および幹部との懇談会が、県庁教育委員室において行われました。その概要について紹介します。

森田会長あいさつ

まず、森田会長から、毎年このような形で管理職の声を聞いていただける機会があることに感謝の意を表し、今回は「地域との協働と信頼される学校づくり」に関する意見交換の場としたいという内容の挨拶がありました。

続いて廣田教育長から、日頃の学校運営に対する敬意、管理職員の給与減額措置を行うことについてご理解をいただきたいとの言葉があり、今回も、教育の現場で子どもたちと向き合っている先生方の生の声を聞かせていただきたいという挨拶で懇談会が始まりました。

廣田教育長あいさつ

「地域との協働と信頼される学校づくり」について

◇上村教育政策課長の説明

新しい『三重県教育ビジョン』の策定にあたって、広く多くの方からパブリックコメントをいただいた。また、現場の先生方の協力を得て、教育に対する児童生徒の率直な意見をお聞きすることもできた。

これらをふまえ、次期『三重県教育ビジョン（仮称）【中間案（修正版）】』では、「三重の教育宣言」で掲げた基本理念を継承しつつ、教育ビジョンに込める想いとして、「オール三重」による教育の推進、社会総がかりで本県教育の推進に取り組んでいくという本県の決意を述べている。

基本施策５「地域との協働と信頼される学校づくりについて」では、施策全体の数値目標として、コミュニティ・スクールに取り組んでいる小中学校の割合を増加させることを挙げている。

基本施策５は、さらに７つの施策に細分化されるが、その中の一つである「（1）地域とともにある学校づくり」については、主な取組内容として、コミュニティ・スクールの仕組みを導入する市町や学校の拡充に取り組むこと、コーディネーターの資質向上に向け、交流会や研修等を実施すること、カリキュラム・マネジメントに関する研修の実施や学校自己評価および保護者・地域の方々等による学校関係者評価をふまえた改善活動につなげていくことに触れている。

「（3）教職員の資質向上とコンプライアンスの推進」については、主な取組内容として、①ライフステージと職種に応じた研修の実施、②授業力向上に向けた研修の実施、③ＯＪＴの推進と中核的リーダーの育成、④新たな取組に対応した教職員の専門性の向上、⑤研修に参加しやすい環境の整備、⑥教職員育成支援のための人事評価制度の適切な実施、⑦高い専門性と豊かな人間性を備えた人材の確保に向けた取組、⑧不祥事根絶およびコンプライアンス意識の確立に向けた取組を挙げている。また、⑧についてはより強い決意を示すため、「根絶」という表現とした。

「（4）学校における働き方改革の推進」については、主な取組内容として、①時間外労働時間削減に向けた取組、②各種課題対応のための専門家や外部人材の活用、③職場環境や組織風土づくりの改善を一層推進するための取組、④教職員の健康管理対策、⑤教職員のメンタルヘルス対策に触れている。

（一）地域とともにある学校づくりについて

◇森田会長より提案

地域とともにある学校づくりを進める上で前提となるのは、教育的効果があるということ。実際に学校現場で動いていくのは先生方であって、やらされ感があってはいけない。自ら取り組むことで教育効果が高まるということを確認するのは、管理職の仕事と思う一方で、やはり課題は教職員の負担である。もう一つは、地域の学校への関わり方である。学校のニーズに応じた関わり方をしてもらえるためにも、コーディネーターや退職校長のサポーター、ボランティア等、地域性を考え、県だけでなく市町での取組もお願いしたい。

《意見交換》　※県□、校長会○

○学校の窓口となる教頭先生や担当の先生の負担感を減らしていくためにも、コーディネーターは地域の方から出していきたい。

□そうしたコーディネーターを三年計画で養成しており、現在二年目。また、退職校長は地域や学校をよく知っており、先生たちに負担にならないように考えて動いていただける。県としても、先生方の負担にならないようにしようとしているところである。

○以前の勤務校で、地域に人脈のある元役場職員は、学習サポーターだけでなく、職場体験の事業所開拓、連絡調整もしてくださった。学校が担うべきところまでしていただき、負担軽減につながった。

○学校を支えていただける方は、他の役職を兼ねていることも多く、会議や仕事が重なること等は課題。

□中学校区で一つの運営協議会にし、同じ組織とすることも解決の方策の一つである。また、地域からの苦情を運営協議会で共有し、地域の方々から話していただき解決につなげたことで、学校の負担を軽減した事例もある。

○学校運営協議会が学校支援地域本部に依頼する際など、両組織をつなげる役割を持つのがコーディネーター。この両輪がバランス良く回っていくためにもコーディネーターの人選は重要。

（二）教職員の資質向上について

◇山本副会長より提案

子どもたちが、新しい時代を生き抜いていくためにも、英語教育、プログラミング教育はとても重要である。研修会やＯＪＴによる学びとともに、教職員が、日々の取組の中で地道に積み上げ、自ら学び続けることが大切である。

県が全国学調や「みえスタ」の結果を分析して説明・発信したことを、校長が持ち帰って市町に広げ、学力が向上した。今後も英語教育等の新たな取組については情報発信をお願いしたい。

課題としては、ＩＣＴ環境の推進や英語教育のＡＬＴ配置に関しても市町による差が大きい。三重県の子どもたちが、同じように学べるようにしてほしい。

《意見交換》

□国においても、小中学校で一人一台パソコンを整備するといっているので、国費を活用しながら、三重県内の各学校で格差なく子どもたちが安心して学べるようにしていきたい。

○外国につながる児童生徒が増えてきている中で、日本語でのインプットが難しく、ＩＣＴ環境の整備による視覚教材や具体物での学びはとても効果があり、概念形成および日本での暮らしには欠かせないものとなっている。

○プログラミング教育等、これまでの学びを財産として共有していくことが大切。

□県では、メンターの実践事例集を作成しているので、活用に関して周知を図っていきたい。

○英語教育に関わって、免許をもっている講師の方にお世話になっておりとても助かっているが、他校間との移動の課題もある。県としては、担任は誰でも英語を教えないといけないという方針なのか、専門性をもった英語専科等の導入を考えているのか、どちらを重視しているのか教えてほしい。

□小学校英語に関わっては、教員採用試験において英語のできる人材を特別枠で採用している。また、英語免許取得に関しても、積極的に推進している。

○小中の人事交流も大切。中学校からの乗り入れ授業が効果的ではあるが、小中両方の免許を持っていれば、小学校において英語の授業ができる教員も増える。人材確保の点では、大学との連携もお願いしたい。

□採用試験の受験に小中両方の免許が必要となると、間口が狭くなり、採用試験受験者数が減少する恐れがある。先生方も、人事交流に対して積極的になっていただき、小中どちらも経験していくことが今後の教員生活にも良い影響を与えていくという意識改革をお願いしたい。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

出席者

三重県教育委員会

教育長　廣田　恵子
次長（学校教育担当）　長谷川敦子
次長（育成支援・社会教育担当）　森下　宏也
次長（研修担当）　吉村　元宏
教育総務課長　桝屋　眞
教育政策課長　上村　和弘
教職員課長　早川　巌
小中学校教育課長　大塚　千尋
〃課長補佐兼班長　尾上　修一

三重県小中学校長会

会長　森田　定
副会長　山本　究
副会長　山下　高弘
副会長　山田　洋一
幹事　中川　克己
幹事　伊東　直人
幹事　中瀬　鉄夫
幹事　小林　弘明
幹事　掛橋　敏也
広報委員会委員長　篠木　素道
広報委員会副委員長　古川千登世
事務局長　加藤　久
事務局次長　大西　学
事務局次長　森田　正美

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

本部役員だより

一年を振り返って思うこと

三重県小中学校長会
小学校部会長
山本　究

「平成」から「令和」へと年号が改められました。知識基盤社会やグローバル化・情報化が進展し、先を見通すことがますます難しくなってきている変化の激しい時代を迎えています。学校現場においても、新学習指導要領全面実施に向けての準備・部活動の適正化・道徳の教科化・学力の向上・働き方改革など、校長がリーダーシップを発揮しなければならない課題がたくさんあります。

本年度の全国学力・学習状況調査で、本県では、小中学校合わせた五教科中四教科で全国平均正答率を上回り、調査を開始した平成十九年度以降最も良い結果となりました。これは、三重県小中学校長会が、三重県教育委員会と連携し、ワークシートを各学校に配付し、「わかる授業をめざした授業改善」「子ども一人一人の状況に応じたきめ細かな指導」に、校長のリーダーシップのもと学校全体で地道に取り組んできた大きな成果であると言えます。とりわけ、三重県小中学校長会の役員会・代表者会において毎回、三重県教育委員会事務局学力向上推進プロジェクトチームからの情報提供を受け、学力向上の方策がきめ細かく各校長に伝えられ、実践されたことは大きな要因と考えます。

また、来年度からの勤務時間の上限制限が求められるなか、特別委員会では、「働き方改革」に係るアンケートを全校長に実施しました。そして、それをもとに三重県教育委員会事務局の担当者と話し合いを行いました。働き方改革については、各校で行事の精選や会議の簡素化など取組は進められていますが、多忙な状況が改善されたとは言えません。教職員が元気な姿で子どもたちの前に立つことができるように、地域・保護者・県教育委員会や市町教育委員会と連携し考えていくことが重要です。

管理職の給与減額については、早い時期から役員会で議論を重ねてきました。九月の学校経営委員会の県教育委員会への予算要望の場でも取り上げました。十一月に、来年度も実施されるということを受け、役員会・代表者会・市町校長会での説明を求めました。到底納得できるものではありませんが、私たちは教育者として士気を下げることなく、子どもたちの未来のために学校経営にあたっていく責務があります。

三重県小中学校長会は、新学習指導要領の全面実施・働き方改革という大きな変革期にあるということを認識し、国や県等が示す様々な教育に関する施策について情報を収集し議論し、組織力を生かし学校現場からの声を大切に、関係機関や関係団体と連携し、諸課題の解決に向け取り組んできました。

会員の皆様には、この一年、三重県小中学校長会の諸活動にご理解とご協力をいただき、誠にありがとうございました。心より感謝申し上げます。

私の薦める一冊

興味深いですよ「快脳教育」

川越町立川越南小学校
校長　加藤　剛

こんな古い本を紹介してよいのか迷いながらも、私の「教諭時代の雑な指導方法」に変化をもたらした一冊を紹介したい。

私の薦める一冊は「快脳教育」山本光明著（サンマーク出版）である。ただしこの本は、一九九六年の出版で、現在は絶版である。

私は若い頃、いつも大声を張り上げ、きつい言葉で児童を叱る、目も当てられない教師だった。

六年生を担任していた時、体調を崩して椅子から立ち上がれず、指導机にうずくまるような状況で勤務をしていた期間があった。

そんな時、子どもたちから、「先生、授業は私たちで進めるから、無理しないで座っていて。」と言われた。

任せてみたら、私が大声を張り上げずとも、子どもたちはにこにこしながら学習をしている。そのような子どもたちの様子を見て、「みんなありがとう。」等、心からの感謝の言葉しか出なくなったら、さらに学級がほんわかし、ますます居心地の良い雰囲気になっていった。

そんな時に出会ったのがこの本である。著者の山本光明さんは神戸市が本部の塾経営者である。

塾講師が急に退職することになり、これまで講師の経験のない山本さんが教壇に立たなければならなくなった。しかし、偏差値が非常に高い学校へ進学を目指している生徒が相手であり、山本さん自身が解けない問題がある。困った山本さんは、こちらから一斉指導するのではなく、個々に合った問題を準備し、それを解かせ、こちらに説明に来させるスタイルをとった。そして、解き方を聴くときには、「さすが」「○○さんなら、解 けるね」等と褒めや励ましの言葉をかけていたら、不思議と生徒はさらにやる気が出て、偏差値まで上がっていった。

この本の中で、山本さんは、「教えるのが本当にいいことなのか」という提案までされている。

指導方法の改善だけでなく、管理職の部下への指導にも役立つ本である。中古本がお安くなっているので、今が買い時だ。

随想

私の足跡は・・・？

明和町立大淀小学校
校長　辻　雅大

「定年」という節目が近づいてきて、三十七年間の教師生活を振り返って、いろいろと思いを巡らせるようになりました。

最初の四日市市の小学校での三年間は本当に未熟で、周囲の皆さんに助けられた記憶ばかりが蘇ってきます。

中学校の社会科教師として松阪市や多気郡で過ごした十七年間は、失敗もあった反面、やりがいや学校へ行く楽しさを感じていた時代です。「働き方改革って、何のこと?」という感じの日々でした。

行政での六年間を経て、管理職として十一年間を過ごしました。

三年前の四月には、自分の地元の小学校に、校長として赴任しました。校長室には歴代の先輩校長の写真が飾ってあり、皆さんの両目が私に向けられている気がして、緊張感一杯のスタートでした。

自分の地元であり、知っている方だけでなく知らない方からもたくさん声をかけていただき、本校への注目や期待感の大きさを感じて日々を過ごしています。教職員も、子どもたちのために惜しみなく頑張ってくれています。学校・保護者・地域がまさに「ワンチーム」になって子どもたちの成長を支えてくれることに、自然と大きな感謝の気持ちが湧いてきます。

先頃、明和町では、小学校の校区再編・学校統合の計画案が示されました。五年後に本校は隣の二小学校と統合し、別の場所で、新しい小学校としてスタートする方向です。そんな中「自分は校長としての三年間で、この学校にどんな足跡を残せたのか?」と、自問自答することがありました。先輩校長の大きな足跡とは違う自分の足跡を探してみたりもしましたが、最近は肩の力が抜け、後に誰かが「ほら、ここに大きな足跡があるよ」と言ってくれるだろうと期待することにしました。

近年、時間を作って神社仏閣を巡ることを楽しみの一つとしています。もう少し仕事を続けられるよう、「次回は、健康祈願とともにぼけ封じのお守りも忘れずに買おう」と、心に決めています。

教師生活を終えるにあたって

紀北町立紀北中学校
校長　吉田　由紀夫

間もなく三十八年の教師生活が終わろうとしています。これまでの教師生活を振り返ると、多くの人に出会い、支えていただき今を迎えることができた、「感謝」の一言に尽きます。

私の教師生活は、昭和五十七年四月、現在の紀北町の中学校から始まりました。当時は教育現場に荒れが出始めた頃でした。子どもの姿を掴みきれず、毎日遅くまで先輩の先生方から教師としての姿を教えていただいたことが、つい昨日のことのようです。うまくいかないことが多く、無我夢中で毎日を過ごしていたように思います。ただ、しんどいことや辛かったことが多かったはずなのに、すべてのことが懐かしく、もう一度戻りたいと思えることが不思議です。

私をここまで導いてくださった、多くの管理職の先生方、先輩、同僚との日々の生活が教師としての今

を築いてくれました。
そして、なんと言っても子どもの姿が大きな力となりました。
一つは、初めての卒業式です。無我夢中の学校生活でしたが、義務教育を終え、誇らしげに卒業していく子どもたちの姿に、喜びを感じたことは今も鮮明によみがえります。しんどいことがあった年でも、巣立ち輝く子どもたちの姿に、勇気づけられここまでやってこられたと思います。もうすぐ迎える最後の卒業式は、初心に返り集大成として臨みたいと思います。
もう一つは、尾鷲市の中学校に転勤となり、学校の荒れに直面した時のことです。自分の気持ちをうまくコントロールできず荒れていた生徒が、指導を終え二人になったとき、「俺もう一回中学校やりたい」と漏らしました。飾りのない何気ない一言でしたが、自分の鎧を脱ぎ捨てた十五歳の素直な子どもの気持ちに触れ、心がほっと休まり、あらためて教師の喜びを感じることができました。
この三十八年間は、反省することの多い日々でしたが、子どもたちの成長を見ながら関わって来られたことを幸せに思います。
感謝！

あの時、あの人

「亡き師を仰ぐ」

桑名市立修徳小学校
校長　小島琢也

先に急逝された柴田松男先生のことが頭から離れません。
柴田先生は、私が初任で赴任した桑名市立七和小学校の校長でした。三月末に赴任の挨拶で校長室に出向くと「ちょっと待っとって。甲子園が…」と待たされたのが一番古い記憶です。
しばらくして、あまりにも私の授業がへたくそだったのか、私のクラスに入って国語の授業をしてくれました。正直言ってそれほどビックリするような授業ではありませでしたが、三十余年経った今、その時の授業の良さが分かります。基本に忠実な、子どもの思考に沿った丁寧な授業、若いときには、その良さが分からなかったことを恥ずかしく思うばかりです。
柴田先生は朝の打ち合わせでいつも「ありません」一言。その意味も今は分かります。また、職員会議では、快刀乱麻のごとく問題を捌いて、こうするべきとスパッと筋道を付けられる頭脳の切れる真のリーダーでした。痩せ型小柄で勝海舟に似ているところがあるといつも思っていました。
そういえば、柴田先生からいつか聞いた話で「明治維新は若い者がやったんや。君ら若いもんが…」ともおっしゃいました。
もちろん職場内の信頼は厚く、飲み会などで先輩教師からは「うちの親分と番頭さんはピカイチ」と何度聞いたことか。
退職されてからも、お話をうかがう機会がありましたが、現場を離れて数十年経っていてもなお教育情勢に明るく、子どもを信頼し、先生を信頼し、希望にあふれた話をしてくださいました。
そんな大校長に憧れ、勤め続けてきた今、この地球上に柴田松男先生がいないことは空虚ではありますが、柴田先生に言われたことを内省してみると、まだまだ小僧としか思えません。
間もなく定年を迎える歳となっても、まだ目指すべき高い山があるのは幸せなことかもしれません。可能な限りは「若い者」が活躍する教育現場作りに力を貸していきたいと思っています。

「あの頃」

鳥羽市立神島小・中学校
校長　松本久彦

昭和六十年四月、私の教師生活が始まった。大学を卒業したばかり、しかも赴任先の桑名市は私にとって全く縁のない町。それは、初めてその土地を踏むというレベルだった。初任校は桑名市立城南小学校。全校児童六百人超、鳥羽市出身の私にとっては超マンモス校に思えた。新採で五年生の担任をさせてもらった。次の年、その学校の慣例では、そのまま持ち上がって担任することが多いと聞いていた。しかし、転出児童が出た関係で、クラス替えがあった。二年目の六年生は児童数四十五人の三クラス。今では、それだけの児童を一度に担任することはない。六年生になって新しく自分のクラスになった児童もいるが五年生から持ち上がった児童もいた。何より「不公平にならない」ことを心がけていたが、手探りの状態で子どもたちに接していた。しかし、子どもたちは、私のそんな心配を吹き飛ばすように、普通に、子どもらしく接してくれた。修学旅行、新京極で子どもの見守りをしていたら、「先生、これおみやげ。」と言って、一緒に旅行に行っている私に土産を渡してくれた子がいた。マラソン大会では、トップを争うライバル同士が、互いを励ます姿があった。同窓会では、「先生、授業やって」と頼まれ、調子に乗って説教をしたこともあった。結婚式に招待してくれた子も数人いた。自分が病気で弱っているとき、桑名からわざわざ鳥羽まで様子を見に来てくれた子もいた。
校長になって、あと少しで一年になる。「今日は、大きな事故や問題は起こらなかった。」「今日は、保護者から何か言われることはなかった。」そんなことばかり気にしている自分がいる。守りに入っている。今の心の状態で、学校を改革することなどできるはずもない。
新採の頃、経験もなく、指導する力もない自分が、初めての地で、学校で起こる様々な課題を恐れることなく活動できたのはなぜだろう。自分が担任した子どもたちからエネルギーをもらっていたからだろうか。
「初心に戻ろう。」最近強くそう思う。

地区校長会だより

北牟婁郡紀北町小学校長会

「情報交換と連携を大切に」

紀北町小学校長会は、九校の小学校長で組織されています。前年度末に一校が閉校になり、また、来年度末で一校閉校の予定です。東紀州地域全体の悩みである児童数激減のために、学校統廃合が大きな課題となっています。

距離的、時間的なこともあり、なかなか校長同士で顔を合わす機会は少なく、月一回の教委主催校長会のあと、自主小学校長会として各校の現状を出し合う時間を持つようにしています。情報交換がとても大切であり、総勤務時間縮減・外国語教育などの課題について各校の取組を出し合い、自校の取組に生かすようにしています。校長はある意味、学校では孤独です。それゆえ横のつながりが大切であり、一人で悩むのではなく、校長同士で連携して対応していくようにしています。また、紀北校長会（紀北町・尾鷲市の小中校長会）という組織があり、そこでは、先輩の退職校長を招いて、校長としての心得や苦労話を聞かせていただく講演会を行っています。先輩が苦労してきたことを知り、自分たちも頑張らなくてはいけないということを再確認しました。また、「人材育成」「総勤務時間の縮減」「危機管理」という喫緊の課題をテーマにして話し合う学習会も行って、校長としての力量を高める努力をしています。

この三月で九人中二人が定年退職を迎えます。新たな二人の校長を迎えて、なお一層混迷を深める教育界、とりわけこの地域ならではの学校存続、地域存続という大きな課題を乗り越えるために、小中校長会がしっかり連携をとって、立ち向かっていかなくてはいけないと考えています。

名張市中学校長会

名張市長は、市民に向けてのあいさつの中で「市の小中学生の転入が転出を上回っています」「学力において、県内の全市の中学校の中で、本市は学力がトップにあります」と、教育の充実、子育てしやすい街として発信されています。

市長（市民）からの学校教育への期待と心地よいプレッシャーの中で、私たち名張市中学校長会五人は、情報交換・意見交換を密にし、日々奔走しています。

名張市は、令和二年度を全中学校区で「コミュニティ・スクール」を基盤に据えた小中一貫教育」元年と位置付け、準備を進めてきました。

市教育委員会のご指導・ご支援のもと、中学校区内の小学校と会議を重ね連携を密にし、各中学校区小中一貫教育グランドデザインを策定し、実態に応じた小中一貫教育を進めようとしているところです。そのために各中学校長が、校区内の小学校と連携を密にし、コーディネーター役を担っています。

また、名張市は、「教育福祉連携総合支援システム」を進めているところであり、児童相談所、子ども発達支援センター等福祉部局との連携が深まっています。

さらに、中学校卒業後の進路を見据え、県立学校とのつながりを大切にし、市内県立学校長と中学校長との意見交換会を行っており、私たち中学校長は新たな情報を得て、学校経営のための視点をいただいているところです。

喫緊の課題として、ＣＳ、小中一貫教育、働き方改革、教員の指導力向上、部活動の在り方等ありますが、校長会として力を合わせて立ち向かっていきたいです。

編集後記

まだまだ寒い日が続きますが、日毎に陽が長くなり、春を感じられるようになりました。学年末にあたり、卒業式の準備や今年度のまとめ、そして新年度を迎えるにあたっての企画など大変お忙しい日々をお過ごしのことと思います。

さて、「校長会みえ」も年三回の発行を無事に終えることができました。これもひとえに、多忙な中での原稿執筆やご協力いただきました皆様のお陰と深く感謝申し上げます。

いよいよ小学校はこの四月より、中学校は再来年度より、新学習指導要領の本格実施に入ります。大変忙しい中ですが、各校、着実に実施に向けての体制作りが確立されていることと思います。その他、学校現場では、今日的な課題もたくさん出てきており、まさに多様化への順応、対応力も求められています。今後も効率よく、効果の高い教育につながるよう、皆さんのアイデアを生かして、さらに推進していきましょう！

最後になりますが、来年度も皆様の声を反映しながら、会員相互の情報交換を図り、さらなる校長会組織の充実に役立つ会報になるよう務めていきたいと思います。引き続きご愛読いただきますよう、よろしくお願いいたします。